

対しYグラフト置換術を受けた。朝からの左下腹部痛を主訴に当科外来を受診、左下腹部圧痛とともに拍動性腫瘤を触知、貧血の進行、CT所見から吻合部仮性動脈瘤破裂の診断にて、緊急手術となった。瘤を開くと、Yグラフト左脚の末梢側吻合部は完全にはずれて、瘤内に浮遊していた。この部位のみ新たにバイパスし、手術終了した。現在術後経過観察中である。この患者は最近10年以上外来受診しておらず、仮性動脈瘤の発症時期は不明であるが、術後仮性動脈瘤の発症も念頭に置き、定期的な経過観察が必要であると考えられた。

15) 心臓血管外科手術における頸動脈エコーの有用性について

榛沢 和彦・大関 一
佐藤 浩一・斉藤 憲
諸 久永・林 純一
江口 昭治 (新潟大学第二外科)

近年、本邦においても頭蓋外頸動脈病変が増加している。頸動脈病変は術前術後の脳梗塞の原因となるばかりでなく、体外循環内の脳灌流に影響し、術後脳障害の発生に大きく関与する。我々は非侵襲的に行える頸動脈エコー検査に着目し検討を行ってきた。今回、断層法とドップラー法を併用する、いわゆる duplex scanning や、最近開発されたパワードップラー法を用いることで効率的に高い感度で頸動脈の病変を検出できることが判明したので報告する。更に、術前頸動脈エコー検査で高度頸動脈狭窄を認めた CABG 症例に対し体外循環中、経頭蓋骨エコーによる脳血流モニタリングを行い、人工心臓の灌流量を調節し良好な結果を得た1症例を報告する。

16) 腹腔鏡下胆嚢摘出術における摘出標本検索上の問題点

吉田 奎介・川合 千尋
川上 一岳・滝井 康公 (日本歯科大学新潟
三間智恵子 (歯学部外科教室))

腹腔鏡下胆嚢摘出術では開腹胆嚢摘術に比して標本の損傷が著しく、検索上問題があるとの指摘があるので、当科での摘出標本につき肉眼的に見た損傷度を検討した。途中開腹移行例を除く202例を対象とした。胆嚢全域が完全に摘出された良好例85、微小な壁欠損(損傷)あるもほぼ良好65、壁欠損があり検索に若干問題あるやや不良23、欠損が大きく検索困難な不良30(15%)であった。不良の原因は高度胆嚢炎次いで暴力的操作(牽引と焼灼)

であった。予想よりも粘膜炎の損傷が少ない結果であったが、術後胆嚢管癌発生例も認めており、胆嚢管離断部を含め全域の検索を可能とする努力が必要である。

17) 妊娠を継続しつつ切除可能であった腓体尾部癌の1例

山崎 哲・草間 昭夫
岡村 直孝・若菜 隆二 (長岡赤十字病院)
田島 健三・和田 寛治 (外科)
広田 雅行 (同 小児外科)
加嶋 克則・鈴木 美奈
安田 雅子・安達 茂實
須藤 寛人 (同 婦人科)

症例は28才女性で、妊娠22週時に心窩部痛を主訴に近医受診し上腹部腫瘤を指摘された。非侵襲的検査であるMRIとUSが施行され、腓体尾部に嚢胞を伴った腫瘤を認めたため当科紹介入院となった。本人、家族、婦人科医と相談し、妊娠を継続しつつ手術の方針とした。手術所見では腓体尾部に8×12cmの内容に粘液を含有する腫瘤を認め、腓体尾部脾合併切除を施行した。病理組織診断では乳頭腺癌高分化型管状腺癌を混じた多彩な像を示す浸潤性腓管癌の所見であった。術後経過は良好であった。塩酸リトドリン(ウテメリン注)の投与を継続し満期、経膈分娩が可能であった。

悪性腫瘍を合併した妊婦に対する外科治療の問題点について考察する。

18) 肝転移と鑑別が困難であった、乳癌術後 Focal fatty liver の1切除例

杉本不二雄・斉藤 六温
関矢 忠愛・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)
早見 守仁 (外科)

症例は、51歳、女性。1987年9月14日、Lt. breast cancerにて、Modified radical mastectomy, R2, (Patey' method) 施行。t1n0MO, stage 1, pathology; invasive ductal carcinoma, n0. ER (+). 術後 adjuvant therapy, TAM 30 mg/day を2年間投与した。定期的に、骨シンチ、胸部単純X線、肝エコーをチェックしていたが、1995年12月14日の腹部CTにて、肝S4に1.5cm大のlow density areaを認めた。同病変はエコーでは不整なhigh echoic areaで、Dynamic CTでは、わずかにenhanceされ、血管造影上は異常所見は認められなかった。以上より、Breast cancerのliver meta.を疑い、1996年2月19日、手術を行った。術中所見で